

3 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に HB 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の A・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 寒い冬の夜空に星が輝く。
- (2) 共通の友人を介して知り合う。
- (3) 傾斜が急な山道をゆっくり上る。
- (4) 紅葉で赤く染まる山並を写真に撮る。
- (5) 真夏の乾いたアスファルトが急な雨でぬれる。

2

次の各文の——を付けたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 私の住む町は起伏にトんだ道が多い。
- (2) 山頂のさわやかな空気を胸いっぱいに入ろう。
- (3) コンサート会場でピアノのドクソウを聴く。
- (4) バスのシャソウから見える景色が流れていく。
- (5) 毎日欠かさず掃除をし、部屋をセイケツに保つ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

高校生の美緒は、母親との言い争いをきっかけに、父方の祖父が営む岩手の染織工房で生活し始め織物制作を学んでいる。八月上旬、父親の広志から電話があり、母親と共に岩手に行くのでひとまず一緒に東京に帰らないかと言われた。同じ頃、シヨール作りの練習として作り始めたカーテンの色を決めかねていた美緒は、祖父から「コレクションルーム」で気に入った色を探すように言われた。

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

(伊吹有喜「雲を紡ぐ」による)

〔注〕 祖母——美緒の母方の祖母。横浜に住んでいる。

ホームспан——手紡ぎの毛糸で手織りした毛織物。

私のショール——美緒が生後間もない頃に父方の祖父母から贈られた、とても大切にしている赤い手織のショール。

雪童子——子供の姿をしている雪の精。

コチニール染め——コチニールカイガラムシから採れる赤色の天然色素を用いた染色作業。

せがなくていい——急がなくてよい。

〔問1〕⁽¹⁾「ねえ、おじいちゃん。あの棚の本、あとで私の部屋に持っていない？」とあるが、このときの美緒の気持ちに最も近いのは、

次のうちではどれか。

ア 幼い頃を感じられなかった、絵本の美しさや楽しさに気付かせてくれた祖父に親しみを抱き、祖父の本をもっと読みたいと思う気持ち。

イ 祖父が絵本に登場する服の色に着目していることに興味をもち、自分の本と棚の本を研究して、祖父に認めてもらいたいと思う気持ち。

ウ 祖父が親愛の情を示してくれたことを嬉しく感じ、自分が棚の本に興味を示すことによって、祖父をもっと喜ばせたいと思う気持ち。

エ 会話を通じて祖父の人柄や考え方にひかれ、祖父が集めてきた棚の本を読むことで、本の好みや選び方を知りたいと思う気持ち。

〔問2〕⁽²⁾ ノートをのぞくと角張った字と、流れるような書体の祖父の筆跡が混じっていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 祖父が曾祖父の厳格さに反発する気持ちをもっていただけを、二人の対照的な書体を対比させて描くことで、象徴的に表現している。

イ 祖父が曾祖父と共に芸術的表現を追求していたことを、二人の筆跡をたとえを用いて技巧的に描くことで、情緒的に表現している。

ウ 祖父が曾祖父と共に染めに携わりつつ記録を引き継いできたことを、二人の異なる筆跡を視覚的に描くことで、印象的に表現している。

エ 祖父が曾祖父と共に色鮮やかで美しい糸を紡ぐ仕事を続けてきたことを、二人の字形や色彩を絵画的に描くことで、写実的に表現している。

〔問3〕⁽³⁾ 即答したが、そのあとの言葉に祖父は詰まった。とあるが、「祖父」が「そのあとの言葉」に「詰まった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 一度は否定したものの、当手を振り返って本当はがっかりしていたのだと思い直し、そのときの気持ちを美緒に伝えたいと思っていたから。

イ 息子が自立したときに抱いた切なさや、家業に対する息子の思いを推し量っていたことを振り返りつつ、美緒に伝える言葉を探していたから。

ウ 息子の進んだ道に理解を示しつつも、心の底に抱いてきた寂しさや疑問が不意に膨れ上がり、気持ちを懸命に抑えようとしていたから。

エ 気落ちしなかったと答えたのは、祖父としてただ威厳を示そうとしたためだったと気づき、美緒にどう説明すべきか迷っていたから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 目の前にある大量のノートを美緒は見つめる。とあるが、この表現から読み取れる「美緒」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 脈々と続いている生命と家業の技術を尊く感じつつ、父が自分の名前に込めた家業の継承への期待を知って徐々に意欲を高めている様子。

イ 目の前にある大量のノートに記されたこれから関わりようとしている仕事の量と質の高さに戸惑い、自分の拙さを強く感じている様子。

ウ 曾祖父と祖父の染色への思いや労力に敬服するとともに、父が大切に思っていた家業を継がなかった真意を測りかねている様子。

エ 曾祖父と祖父の研究の重みや自分の名前に込められた父の思いを想起しつつ、ノートに従って糸を染めてみたいと考えている様子。

〔問5〕⁽⁵⁾ はい、と小声で答え、美緒はメモを受け取る。とあるが、このときの「美緒」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 染めに取り組みむことが認められなかったことはもつともだと納得し、シヨールの色を決められない自分の優柔不断さを嫌悪するが、父親たちにはまだ自分の能力の限界だとは思われたくないと願う気持ち。

イ 染めの希望がかなわず残念に思うものの、決断力の弱さを指摘されてもなお染めに対する意欲を失わず、父親たちとの再会に思いを巡らす中で自分のこれからのことをどのように伝えるべきか迷う気持ち。

ウ 染めに取り組みたいという願いがかなわなかったことに悲しみが込み上げ、急がなくてよいという祖父の慰めの言葉と、父が祖父を説得すれば染めに取り組めるかもしれないという期待にすがりたい気持ち。

エ 染めの仕事を認めようとしないう祖父の態度に困惑しながら、決断力の弱さを自覚して落胆するとともに、父親たちとの再会を控えて染めとの向き合い方を模索してこなかったことを後悔する気持ち。

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾 申請中

(堀部安嗣「住まいの基本を考える」による)

〔問1〕⁽¹⁾ そんな団地の小学生の話やポルトガルでの体験は、複合的で抽

象的な懐かしさという事で共通しています。とあるが、「複合的
で抽象的な懐かしさ」とはどういうことか。次のうちから最も適切

なものを選べ。

ア 未知の事象がもつ情感と潜在的な記憶がもつ情感が重なり合うこと
で思い出される、幼少期の記憶から生じる懐かしさのこと。

イ 未知の場所との出会いから生じる喜びと情感溢れる場所の記憶から
生じる郷愁との比較を通して、心に浮かぶ懐かしさのこと。

ウ 未知の風景を前にして感じる、かつて住んでいた町の失われた景色
に対して抱いた喪失感から生じる懐かしさのこと。

エ 未知のものと出会うことによって、潜在的に存在する様々な記憶の
断片がつなぎ合わされて湧き上がる懐かしさのこと。

〔問2〕⁽²⁾ 懐かしいという感情によって人生の中で新たな価値を見出したの

です。とあるが、「人生の中で新たな価値を見出した」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 経験を積み以前とは異なる視点をもつことで、久しぶりに出会った

ものにこれまで気付かなかった魅力を感じたようになったということ。

イ 自分の経験から得たものの見方で目の前の事象を見直すことによっ

て、伝統や慣習にとらわれない新たな価値を見付けたということ。

ウ 前向きで大切な感情を伴う過去の記憶に導かれるように、周囲にあ

るものにかつて抱いていた誇りがよみがえってきたということ。

エ 久しく出会うことができなかったものに対して、時間が経過しても

そこに見出していた魅力を改めて感じる事ができたということ。

〔問3〕 この文章の構成における第六段の役割を説明したものとして最も

適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた懐かしさに関する説明について、筆者の認識

の根拠となる事例を挙げることで、自説の妥当性を強調している。

イ それまでに述べてきた懐かしさに関する説明に基づいて、筆者が述

べた内容を要約し論点を整理することで、論の展開を図っている。

ウ それまでに述べてきた懐かしさに関する説明を受けて、筆者の認識

とは異なる具体例を示すことで、文章全体の結論につないでいる。

エ それまでに述べてきた懐かしさに関する説明に対して、筆者の主張

と対照的な事例を列挙することで、一つ一つ詳しく分析している。

〔問4〕⁽³⁾ そんな中、私は世の中が更新し続けるもので埋め尽くされてゆ

けばゆくほど建築こそは動かずにじっとしていて、慣れ親しんだ

変わらない価値を示すものでなければならぬという思いを強く

してきたのです。と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も

適切なものを選び。

ア 未来への前向きな意志をもつことが難しい世の中ではあるが、建築

だけは、懐かしさや郷愁を印象付けることが必要であると考えるから。

イ 急速に物事が更新され続ける現在において、変わらずそこにあり続

ける建築は、人の記憶の原風景となり得る存在であると考えから。

ウ 建築においても、変えるべきことと、変えなくてもいいことと

を整理し、新たな建造物には懐古的な工夫が必要であると考えるから。

エ 明るい未来を築くためには変化を止めることが重要であり、不変の

象徴として建築を位置付け、人々の意識を向けさせたいと考えるから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「自分の『記憶の拠り所』と

なるもの」というテーマで自分の意見を発表することになった。

このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて

二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や、や

「などもそれぞれ字数に数えよ。

A

5

次のAは、鴨長明かものちやうめいが書いた「方丈記」*に関する対談の一部であり、Bは、対談中にてくる「無名抄」*むみょうしようの俊恵しゆんえから長明へのアドバイスに当たる原文の一部である。また、あとの□内の文章はBの現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

掲載許諾申請中

B

掲載許諾申請中

掲載許諾
申請中

(蜂飼耳、駒井稔「鴨長明『方丈記』」による)

掲載許諾申請中

(久保田淳「無名抄」による)

〔注〕 方丈記——鎌倉時代に鴨長明が書いた随筆。京都郊外にある方丈

(豊四畳半ほどの広さ)の部屋に住みながら書いたこと
から名付けられた。

無名抄——鎌倉時代に鴨長明が書いた歌論書。

禰宜——神社における職名の一つ。

解脱——悩みや迷いから抜け出て、自由の境地に達すること。

下鴨——京都にある下鴨神社のこと。

おのづから短き運を悟りぬ——自分には運がないということをも自然
に知った。

中原有安——平安時代末期の歌人、音楽家。

後徳大寺左大臣藤原実定——平安時代末期から鎌倉時代初期に

かけての歌人。

〔問1〕⁽¹⁾ 駒井さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最

も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 直前の蜂飼さんの発言に賛同しつつ、「方丈記」の魅力を語ることで、
話題を「源氏物語」から「方丈記」に戻そうとしている。

イ 「源氏物語」と「方丈記」に関する蜂飼さんの発言を受け、二つの
作品の共通点を述べて、「平家物語」の話題へと広げている。

ウ 自らの疑問に対する蜂飼さんの見解を受け、作品の受け入れられ方
に関する「方丈記」の評価を述べて、次の発言を促している。

エ 二つの作品を対比する蜂飼さんの発言を受け、「方丈記」に絞って感
想を述べることで、話題を焦点化するきっかけとしている。

〔問2〕⁽²⁾ ですから、まあ、さまざま受け取り方に対して開かれている作

品と言っているのかなと思いますよね。とあるが、「さまざま受け取り方に対して開かれている作品」について説明したものとして、最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 書かれている話題が多様なことから、何を主要な要素と受け取るかは、現代における読者に広く委ねられている作品。

イ 過去の読者よりも、現代の読者の心を揺さぶるような内容が複数書かれていて、現代の読者でも理解しやすい作品。

ウ 古典の中でも短いとされてはいるものの、書かれた当時の読者が読めば、多様な受け取り方ができたとと思われる作品。

エ 修行中に、他のことに没頭する自分を戒めようとして書かれているため、現代人が修行する際にも大いに参考になる作品。

〔問3〕⁽³⁾ 俊恵から与えられたアドバイスについては、長明が書いた歌論書の『無名抄』にいろいろ出てきますが、とあるが、Bの原文において、「俊恵」が良いと思う歌はどのようなものだと書かれているか。

次のうちから最も適切なものを選び。

ア 証得して、われは気色したる歌詠み給ふな

イ われ至りにたりとて、この頃詠まるる歌

ウ 何によりてかは秀歌も出で来む

エ 風情もこもり、姿もすなほなる歌

〔問4〕⁽⁴⁾ そういうところに、長明の物事にかける情熱というか、人間臭さ

が表れているなあと思っています。とあるが、「そういうところに、長明の物事にかける情熱というか、人間臭さが表れている」について説明したものとして、最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 歌の才能を認められていたにもかかわらず、「方丈記」の価値が認められなかったところに、不運な長明らしさが出ているということ。

イ 歌に精進^{しょうじん}していたのに、歌人ではなく「方丈記」の作者だと世間で思われていたところに、宿命的な長明の人生が表れているということ。

ウ 不運だと言いながら、恵まれた人間関係の中で歌や音楽の才能が認められ意欲的に取り組む姿に、長明の魅力がにじみ出ているということ。

エ 望む職業に就けず、自分の才能が開花しないのは運がないだけだと思いう姿勢に、長明の前向きで動じない人柄^{ひとがら}が示されているということ。

〔問5〕⁽⁵⁾ かならずやとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 名人で

イ いらつしやるに

ウ 違いな

エ 申すのです